

弘安五年二月二十五日 六一歳

一五八九

伯耆公御房消息
御布施御馬一疋鹿毛御見参に入らしめ候ひ了んぬ。

兼ねて又此の経文は廿八字、法華經の七の巻薬王品の文にて候。然るに聖人の御乳母の、ひとゝせ御所勞御大事にならせ給ひ候て、やがて死なせ給ひて候ひし時、此の経文をあそばし候て、淨水をもつてまいらせさせ給ひて候ひしかば、時をかへずいきかへらせ給ひて候経文なり。なんでうの七郎次郎時光は身はちいさきものなれども、日蓮に御こゝろざしふかきものなり。たとい定業なりとも今度ばかりえんまわうたすけさせ給へと御せいぐわん候。明日寅卯辰の刻にしやうじがはの水とりよせさせ給ひ候てこのきやうもんをはいにやきて、水一合に入れまいらせ候てまいらせさせ給ふべく候。恐々謹言。

二月廿五日

謹上 はわき公御房

日朗花押

本日は第二祖日興上人の御祥月命日に当たりますので法要を修し御参詣の皆様方と共に御報恩申し上げた次第であります。日興上人は芹が大変お好きだったと伝えられておりますので、興師会(日興上人の祥月命日)のお膳には芹をお供え申し上げるのであります。それ故、この興師会を芹御講とも申します。また第三祖日目上人は蕪が大好物であったと伝えられております。それ故日師会(日目上人の祥月命日)は蕪御講と云つて蕪尽くしのお膳をお供え申し上げて、御報恩申し上げるのであります。

只今拝読の御書は「伯耆公」に宛てられた御書ですが、伯耆公とは「日興上人様」のことであります。弘安五年は、丁度大聖人様が御入滅になつている年であります。が、この頃、日興上人は上野(大石寺一帯の地名)の南条家に居られました。その理由は南条時光殿の病氣見舞いのために遣わされていたものか、或は富士方面の布教のために滞在させていたと思われます。この富士の日興上人のもとへ身延におられた大聖人様が手紙を遣わされたのがこの御書です。実はこの御書の御真蹟は總本山大石寺に現存しています。しかし、大聖人様の御真筆ではありません。又、この頃は身延にお住まいにておられた大聖人様は相当に御身体のほうも衰弱いたされており病床にあられたのです。それ故本抄は六老僧の中の日朗という人が代筆された書であります。ですからこの御書が代筆であることを知らないで読むと、大聖人様を変に思つたりしてしまふかも知れません。と言うのも御自身のことで敬語を使われたり、途中から調子が変わつたりしているからです。これはあくまでも日朗という人が代筆した御書ですから、そのつもりで拝讀していかなければなりません。

さて、本抄の始めの部分には南条時光殿から大聖人様に御供養申し上げた馬一頭を御覧に入れたという御報告が記されています。この頃の南条時光は相當に病気が重かつたように見受けられます。時光殿の大病の知らせを受けられた大聖人は日朗に命じて時光の病氣平癒のため、法華經薬王品の「病即消滅・不老不死」等の経文二十八文字を焼いて

た灰と精進河の水一合を交ぜて与えよという護付の作法を大聖人からお聞きしたまま日朗の手によつて本抄は認められております。そして更に、大聖人は三日後の二月二十八日に、「法華証明抄」を認められ、信心堅固に病惱を克服するよう励まされております。先程も申しましたが、本抄の前半部分は大聖人が南条時光の病氣平癒のために申された經文の謂れを大聖人から承つたまま、日朗がその意を説明書きしたもので、後半の部分は大聖人の仰せのままに、そのまま書かれたものであります。それ故前半の部分は敬語が使われたりして変な感じがいたします。しかし、内容は大聖人の仰せを代筆した書状には変わりなく、本抄は大聖人の御書として扱うべきではないかと思うものであります。事実、明治以後に敢行されている御書は「日朗代筆・富士大石寺藏」として大聖人の御書として扱われ収録されているのであります。また昭和四十六年に大石寺が出版した「昭和新定御書」、平成六年発行の「新編御書（一五八九頁）」にも収録されています。

本抄を通訳いたしますと、先ず最初に、南条時光殿からの御供養の鹿毛の馬一頭を大聖人に御覽にいれましたと、あります。鹿毛というのは、鹿の毛のように茶褐色で、たてがみ、尻尾、足の下の方が黒い馬のことであります。次に大聖人が日朗に仰せになつたところの法華經の薬王品の一十八字の經文とは『此經則為。闇浮提人。病之良藥。若人有病。得聞是經。病則消滅。不老不死。』（法華經はこの娑婆世界の人びとの病を癒す良藥である。もし人が病になつた時、この經を聞くことができれば、病はたちまち消滅するのみならず、不老不死となろう）であります。この經文は文永元年の秋、大聖人が御年四十三歳の時の事でありますが、故郷の安房へお帰りなさいています。日蓮大聖人正伝（一二四頁）によれば、「大聖人は文永元年の秋、故郷の安房へ帰省された。建長五年の立宗宣言以来、實に十二年ぶりのことである。その間、正嘉二年の父の逝去にも帰ることのできなかつた、懐かしく思い出多いふるさとであった。これまでには、幕府の要人極樂寺重時、長時、そして藤次左衛門入道を始めとする念佛者たちと結託する地頭・東条景信に阻まれて、東条の郡へ入ることができなかつたとある。地頭景信は執念深く狂暴な性格であつたため、重時、長時の死後も大聖人の生命を狙つてゐることに変わりはなかつた。大聖人は御母妙蓮の病篤しの報せに、我が身を省みず帰省の決意をされたのであつた。悲母は、「伯耆公御房消息」によれば『ひととせ御所労御大事にならせ給い候て』（新定三二二七六頁）とありますから、一年ほども前から病氣であつたようである。大聖人が帰り着かれたとき、懐かしい母は病も重く、まさに臨終の状態であつたのです。

大聖人は心を込めて悲母の快復を祈念された。「可延定業書」に、『されば日蓮悲母をいのりて候いしかば、現身に病をいやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり』（七六〇頁）とあるように、大聖人の祈念によつて悲母の病は日ならずして快復し、さらにその後「定業もまたよく転ず」の金言のごとく、四年の寿命を延べられた。大聖人の孝養の一念は、悲母の身に妙法不思議の力用を現わされたのであつた。」と「日蓮大聖人正伝」にあります。その時、この薬王品の「不老不死」の經文を認められて読まれたの

です。そしてそれを焼いて灰にして浄水をもつて溶かして口に入れられたところ、たちまちに蘇よみがえられたという有り難い経文なのであります。これを今、大聖人の悲母に与えられたように南条時光殿に与えようと思つておられるのであります。これを今、大聖人の悲母に与えて身分は低くあられるが日蓮に深く帰依している者である故、この度の病氣が前世から定まつてゐる業因で命尽きるものと決まつていても今度ばかりは助け給えと閻魔王に対して御誓願されるといでしよう。病氣平癒の方法として、明日の朝早く（寅卯辰とらうぢゆとは午前四時から八時までの間）に精進河の清水きよみずを汲んで来てこの薬王品の不老不死の経文を焼いて灰にして水一合に溶かして飲ませなさい、と申されているのです。

ところで、この精進河というのは、總本山大石寺の西の方を流れている河で、大変綺麗な水が流れています。本山では、この日興上人会の法要の時、毎年この川で採つた芹を御宝前にお供え申し上げるのが慣なまらわしになつていています。実はこの御書の「二月二十五日」の日付の上に「弘安五年」と書かれていますが、これは日興上人が書かれたものです。日興上人は大聖人が身延にお入りになられてからは、殆んど富士方面にあって布教に当たられていたようです。その間、南条時光宅に居留されていました。

南条時光殿は身延の大聖人様に種々の物を御供養されていますから、その度ごとに大聖人様からお札の手紙てじを戴いています。普通手紙には月日はづしか書かれていないのであります。日興上人は南条家に届いた御手紙にはことごとく御自分で年号を書き加えられているのです。

さて、皆さん方が御書の目次を御覧になつて先ず目に付くのが南条家宛なごやでの御書が最も多いのに気づかれたことと存じます。また「真蹟所在」の欄には「大石寺」と言うのが沢山あります。実は大聖人の御真蹟が無くなつてしまつて、この日興上人の写本があるために大聖人の御書が今に数多く伝えられているのであります。又、南条家宛ての御書ばかりでなく、富士方面に届いた御手紙は殆んど日興上人は書写いたされているのです。普通、手紙を書き写して保管して置くというような事はあまり有り得ません。日興上人以外の御弟子さんたちや、御信徒は单なる御礼状だ、ぐらいに思つて粗末にしてしまいました。しかし、日興上人は但お一人大聖人様を末法の仏様と仰いでおられましたので、一々書き留められて後代に伝えられようとされたのであります。

我々の目の前には常に大聖人様が嚴然と在しますのであります。日興上人様が生身の大聖人を御本仏と仰がれたように、私たちも御本尊様を大聖人と拝していかなくてはならないのであります。もそのように御本尊様を大聖人と拝していれば、今のような生半可な信心を厳しく見つめ直すことが出来るのではないでしようか。

私たちが朝晩お経を唱えていますが「寿量品」の中に「雖近而不見（近しと雖いえども見えざらしむ）」とあります。しかば我々は心の底から、御本尊様を「生身の仏日蓮大聖人」と観見できるよう精進すべきであります。以上。